ニュージーランドの先住民・マオリ部族一行が来町

ウポポイ、白老アイヌ協会でアイヌ文化を学び交流

2018年に道と在日ニュージーランド大使館で締結した覚書に基づいた取り組み。同国の独立政府機関エデュケーション・ニュージーランドが運営する奨学金を得た学生や会社員、教師、主婦ら10、20代の若者を中心とした８人が、先住民交流を目的に、１月23日～２月４日の日程で初来道しました。

最初の訪問地・白老では、白老アイヌ協会との交流、ウポポイを見学しました。町役場への表敬訪問では、一行全員で、愛が湧き水のように広がる内容の歌や願いがかなう祈りを込めたマオリ部族の歌を披露してくれました。

白老アイヌ協会の山丸和幸理事長との懇談では、山丸理事長が、現在のアイヌ文化復興に向けた研究者、若者たちの熱心な取り組みを紹介すると、マオリの若者らはうなずきながら聞いていました。同機関チーフアドバイザーのエド・トゥアリさんは、文字を持たないマオリ部族がいかに言葉を残す努力をしてきたかを紹介。現在ニュージーランドではマオリ語は英語と並ぶ公用語で、マオリ語で授業をする学校がたくさんあるということです。一行代表のルーク・モスさんは「（アイヌ民族とマオリ部族の）人と人がつながることが来日の目的です。同様な課題、目的を持っていることが分かり、将来に向け交流していきたい」と感想を語っていました。

懇談後は同協会副理事長の岡田郁子さんの指導で、アイヌ文様刺しゅうに挑戦。一行は楽しそうに異文化体験に取り組んでいました。

24、25日はウポポイを見学。職員による解説や交流も含め、精力的にアイヌ文化の理解に努めていました。一行はこの後、平取、阿寒、札幌を訪問し、先住民族同士の理解、交流を深めました。

知っておこう アイヌ文化

チキサニ

イランカラプテ。しらおいイオル事務所チキサニが開所されてから、まもなく15年が経とうとしています。チキサニの愛称で親しまれ、多くの方々がイオル体験交流事業にご参加頂き、感謝と共に、今後もアイヌ文化と地域社会を支える新たな人材を生み出すベースとなる学習機会を提供するべく、必要となる自然素材の育成と、それを活用した魅力ある体験学習の企画により一層、邁進して参ります。

さて、チキサニとは、アイヌ語でハルニレの木を意味していることを本誌先月号でご紹介しましたが、次のようなアイヌ民族の言い伝えがあります。

コタンカラカムイ（人間の国土を造った神）が初めにヤイニ（ドロノキ）を、次にチキサニを国土に生やし、人間に火を授けるため、火を起こそうとヤイニをこすり合わせたところ成功せず、そのもみくずからは天然痘などのパコロカムイ（疱瘡の神）や悪神、妖怪が生まれ、ハルニレをこすり合わせたところ、瞬く間に火が起き、最高の神として尊敬されるカムイフチ（火の神）が生まれたと言います。確かにヤイニは、ハルニレに比べると、薪にして火を着けても燃焼が弱まって持続性がなく、煙が出てしまい、火力の恩恵を十分に得ることができません。こうした１つ１つの樹木の性質を理解し、暮らしに生かしてきたアイヌ民族にとって、チキサニはカムイフチを生み出した大切な樹木であることがわかります。

イオル事務所チキサニでは、ハルニレをはじめ、アイヌ文化にゆかりのある樹木の育成・管理をポロト休養林や森野地区で行っています

政策推進課　アイヌ政策推進室　学芸員　森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所　チキサニ　☎８２－６３０１